

(様式 3 - 2)

【学力向上フロンティアハイスクール用様式】

- ・各フロンティアハイスクールが作成すること。
- ・学校名、校長名、所在地、電話番号、研究担当者名は必ず記入すること。
- ・以下の記入例を参考に研究の成果と課題、また特徴が表れるよう工夫して、2枚程度で簡潔にまとめること。

学 校 名：京都府立亀岡高等学校
校 長 名：山内 彰
所 在 地：京都府亀岡市横町23
電 話 番 号：0771-22-0103
研究担当者：森 敏之

1 学校の概要

(1) 学校の特徴

本校は京都市の西に隣接する亀岡市の中心にあり、口丹通学園内の唯一の普通科単独高校として、大学進学を中心とした進路実現を目標としている。 類（一般系、文理科系）、 類（人文系、理数系）、 類（芸術系）の各類型を設置し、週34時間授業の実施など類型の特色に応じた教育課程を編成している。

(2) 学校概要

課程	学科	第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		計	
		生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
全日制	普通科	363	9	376	10	368	11			1107	30
	科										
	計	363	9	376	10	368	11			1107	30
定時制											
計		363	9	376	10	368	11			1107	30

(3) 学校の学習意欲・学力向上に関するこれまでの取組

生徒への啓発活動 進路LHRや生徒並びに保護者面談の計画的な実施。

授業の充実 平成14年度は保護者への公開授業や研究授業を全教科にわたって実施。

進学補習・学習合宿 進学補習は各学期及び夏期・冬期休業中に実施してきた。平成14年度からは類に7限指定補習を週3日行った。学習合宿は夏期1年、冬期2年でいずれも2泊3日実施した。

土曜日の活用 サテライト講座の実施

都道府県名	京都府	番号	26
教育委員会担当者名	大島 浩 樹		

(4) 教育課題

学力の向上を図り、希望進路の実現を達成して地域の信頼や期待に応えること。

2 研究の概要

(1) 研究主題

テーマを「自立～自己実現を目指して～」とする。

(2) 研究のねらい

学力向上を基本として、変化する社会の中で「生きる力」をつけることを目的とし、

3年間を見通した進路指導の中で、教科や「総合的な学習の時間」と土曜日の活用を通じて学力の向上を図り、自己実現能力や生きる力を育成するための組織的な教育活動を行う。

また、地域とのつながり（中学校・大学・地元産業・地域社会）を深め、開かれた学校づくりを目指す。

「総合的な学習の時間」においては、特にアントレプレナーシップ（起業家）教育を導入し、地元の企業家や京都学園大学経営学部事業構想学科等と連携しながら自己実現能力を育成する。

(3) 研究組織

校長、教頭のリーダーシップのもと、部長会議を中心とした研究組織とする。

(4) 3年間の計画

平成15年度

・新教育課程の実施（週34時間授業）・文理科系の設置・スタディサポートの導入・総合的な学習の時間の展開・アントレプレナーシップ教育の導入・シラバスの作成・生徒による授業評価の試行・土曜サテライト講座の充実・朝読書の試行

平成16年度

・春期休業中のチャレンジテスト・春期休業中の学習課題の設定・進路相談会の充実・シラバスの作成
・生徒による授業評価の実施・授業研究の推進・総合的な学習の時間の展開
・アントレプレナーシップ教育の充実・土曜サテライト講座の充実
・朝読書の展開・評価規準の研究

平成17年度

・シラバスの完成・2年間の総括ををふまえた総合

3 本年度の取組

(1) 研究の実際

研究の初年度である今年度は、さまざまな新しい取組をはじめた。その中からいくつかについて紹介する。

新教育課程の実施

指導要領の改訂に伴い、柔軟な教育課程が編成できることを活用して、類型の特色に応じた教育課程を編成した。(類及び 類文理科系は週3 4 時間授業、 類は週3 1 時間授業)

スタディサポートの導入

生徒の学力実態の把握と学習状況・生活実態の把握を行い、具体的な学力向上対策を立てるために実施した。

年度当初に学力テストと学習状況リサーチを行い、2 回の分析会をへて、本校の課題として学習習慣がついていないことが明らかになった。

総合的な学習の時間

総合的な学習の時間では、アントレプレナーシップ教育の手法を取り入れた。特にその中心となるバーチャルカンパニーを 類標準系の1 クラスで実施した。

バーチャルカンパニーとは、地元企業の支援を受けながら、ネット上に仮想会社を設立し、商品開発や売買を行いながら、企業運営や電子商取引を学ぶもので、生徒が自ら考え実行する「生きる力」の育成をねらいとしている。



トレードフェアの様子

生徒による授業評価の試行

授業の改善をするための一つとして、生徒による授業評価に取り組んだ。今年度は試行として2 学期末(希望する先生)と学年末(クラス指定)に授業評価アンケートを行った。またその中で、生徒自身の授業への取り組み方についても自己評価させた。

(2) 教材、資料等の作成状況

生徒による授業評価アンケートとその結果を分析したレーダーチャートを作成した。

4 研究に対する評価

(1) 研究の成果

新教育課程による週3 4 時間授業は、授業時間数の増加(930 時間(H14) 1073 時間(H15))と指導内容の充実につながっている。

スタディサポートにより、学習習慣の欠如、なかでも家庭学習時間の少なさが学力向上に対して大きな課題となっていることが明らかになった。

総合的な学習の時間については、今年度からの全く新しい取組で、バーチャルカンパニーも含め、実施しながら内容に検討を加えていく状況であった。全体発表会に来ていただいた地域の方々からは、発表内容の面白さや工夫、生徒自身による進行などについて一定の評価を得た。

生徒による授業評価については、結果をレーダーチャートにまとめた。一目で授業の評価や改善すべきポイントが示されるので、教科担任自身による反省や授業改善、教科としての授業研究等に活用することが可能である。

(2) 問題点及び今後の課題

今年度は、研究の初年度ということもあって、多くの新たな取り組みを始めたところであり、成果と呼べるものはまだ少ない。

たとえば、スタディサポートについては、年度当初の状況や課題は把握できたが、それに対する具体的な対策の実施とその結果の検証において、十分な取組ができたとは言えない。また、生徒による授業評価についてもまだ試行の段階で、アンケート内容の見直しをはじめ、結果のフィードバック 授業改善 再評価のシステム作りなどが今後の課題となる。

全体として、取組の結果を正しく検証することが必要である。

5 16 年度以降の改善策 基本的には今年度の取組に改善を加えながら内容を充実させていく。スタディサポートについては年度途中にも実施して、年度当初との比較から取組の成果について検証を行い、年度後半の改善につなぐ計画である。

また、今年度の総括から次年度以降新たに取組を進めるものもある。春期休業中のチャレンジテストや学習課題は家庭学習の習慣づけをねらいの一つとしている。

16 年度以降もできるかぎり数値目標を設定し、Plan、Do、Check、Action を徹底して行う。

レーダーチャート例

